

# 女性民族衣装の変容と観光資源化

## －ニューカレドニアのミッション・ローブを例に－

中村 純子

はじめに

§1. ミッション・ローブの創造と変容

§2. アイデンティティとミッション・ローブ

§3. 民族衣装の観光資源化

おわりに

### 梗概

ニューカレドニアの民族衣装であるミッション・ローブはフランス植民地化とともにたらされたが、多様なアレンジによって先住民女性に受容された。そして民族運動を機にアイデンティティと関わり、祭礼やスポーツ時の積極的着用と統一化が顕著になった。ヌメアではヴェトナム人等によって「近代的な」モードへの変容が進み、ミッション・ローブはニューカレドニア先住民文化の表象となった。近年、観光では地域性および民族文化を示す資源として活用が多く、新たなミッション・ローブ商品やホスト（観光受け入れ側）の衣装統一で民族文化の普及に寄与している。

キーワード：ミッション・ローブ、カナク女性、民族衣装、文化変容、アイデンティティ、観光資源化

はじめに

近年、世界各地の民族衣装が観光対象として利用されている。これは観光において展開する文化、すなわち観光文化として注目されていることを示す。

民族衣装は本来、当該民族ないしは部族にとっての物質文化でしかない。それは防寒・保温、社会的身分や性を強調するための装飾であり、当然ながら起源より当該部族社会をかながみるならば観光とは無縁である。しかし観光のグローバル化につれて民族衣装も重要な観光対象となり、多様な衣装が編み出された。

過去からみると、素材、モチーフ、色彩、デザインなどの変容がみられ、観光者の見るべき対象となっている。同時に観光資源化により、民族衣装は地元住民（おもに先住民）にとっても、流行、職業的役割分担、民族の歴史性やアイデンティティを支えるもの、自文化表象の対象となっている。

こうした民族衣装の変容と観光での展開は、独立国家だけではなく、いわゆる「植民地」であった地域、現在も領土ないしは領土に準じる地域においても顕著にみられる。これらの地域で民族衣装はいかなる変

容をとげ、民族意識とどのような関わりがあり、観光資源化で変容が生じるのであるうか。

本論ではニューカレドニアの先住民女性の衣服であるミッション・ローブをとりあげ、フランス植民地化以降の文化変容、そして独立へ向けた民族運動の中でアイデンティティと民族衣装との関係、さらに観光資源化の事例をみることで、観光文化が民族衣装に及ぼす変容と創造を明らかにする。なお、当該地がフランス圏であるため、仏語で「ローブ・ミッション (la robe mission)」と称するが、本論では英語表記のミッション・ローブとする。論文執筆に際して1997年以降の断続的なニューカレドニアにおける観光人類学的フィールドワークに基づくデータ、2005年前後のミッション・ローブに関する調査、2016年に至る参与観察データを用いる。

## 第1章 ミッション・ローブの創造と変容

事例となるニューカレドニアは、1774年にキャプテン・クックによっていわゆる「地理上の発見」がなされた後、1853年フランス植民地となり、フランス海外領土 (TOM) を経て、現在は特別公共団体 (Collectivité sui generis) の地位にある。学問上、太平洋のメラネシアにあたり、メラネシア<sup>1</sup>唯一のフランス圏としてニッケル産業、観光産業を推進する。

ニューカレドニアにはヨーロッパからの入植者到来前から先住民であるカナク (Kanak) が居住していた。彼らはオース

トロネシア語を話す人々で、ヴァヌアツやフィジーの人々と同じくメラネシア系と括られる。独自の文化と言語をもち<sup>2</sup>、ハワイやサモア、タヒチなどのポリネシアと比して文化的均質性が低い。

カナク女性は他の太平洋島嶼と同様に、もとは「半裸体」に近い装束で、腰部において植物の繊維<sup>3</sup>で作ったスカート状の腰蓑を着用していた。ニューカレドニアが仏領となった19世紀後半、来島したキリスト教宣教師が、宗教上の理念からカナク女性の「半裸体」を覆い隠すべくミッション・ローブを考案し、カナク女性に着用させた。牧師が先住民女性に適した衣服を制作するために素描をフランスに送り、当時パリの一流デザイナーによって20世紀初頭に創造された。ミSSIONナリーによって制作されたので、ミSSION・ローブとよばれ、現地ではポピネー (popinée) とも称される。

ミSSION・ローブは胸元にヨークのついた丈長ワンピースで、ヨーク下にレースと切り替えのギャザー、七分袖等は中途がゴムで絞られたチューリップ型、胴体部分の裾付近にもレース、生地之花模様や幾何学模様などが施された服である。概して襟元に後開きか前開きでボタンがあり、薄手の生地でゆったりしたサイズが特長となっている (図1)。

これは太平洋島嶼にみられるように、ミSSIONナリーによって編み出され、先住民女性に着用が強制された衣服、例示するならばハワイのムームーとほぼ同じ起源をもつ衣服である。ハワイも先住民女性の「半裸体」が本来の装束であったが、来島したミSSIONナリーが先住民女性の上半身を覆

い隠すために、船に積載していた布地で誰にでも着られるサイズの服を制作したものがムームーの原型である。当初ヨーロッパで貴族が着用したような襟が高くウェストが絞られたドレスももたらされたが、窮屈なドレスよりも既製でゆったりしたムームーの原型が気候風土にも合い、島の女性に受け入れられていった。現在ムームーは祭礼やフラの正装となっている。

これらの衣服は先住民女性の「半裸体」にキリスト教的な道義心、欧米的感觉に基づく羞恥心をもって対応した結果といえよう。ただしミッション・ローブは宗主国フランスで一流デザイナーがデザインを担当したように、貴族の衣服の流用でもなく、寸胴な大量生産の既製服でもなく、起源においてフランスの最新の流行を盛り込んだ服であった。

最初にミッシヨナリーが布教に入っのがロワイヨテ諸島のリフー島<sup>4</sup>であり、プロテスタントであるロンドン伝導教会がローブをカナク女性に着用させた。オレリーとポワリエが「先住民女性にとってローブは日常着であり、平日から日曜まで着用する。ローブの形は変化している。島のプロテスタント女性はカトリック信者よりも習慣的に着用している」(O'Reilly et Poirier 1953)と述べているように、プロテスタント信者から普及した衣服である。これがカトリックにも波及し、リフーだけでなく他島や本島(Grande Terre)に広がった。ただし直接ミッション・ローブになったのではなく、腰蓑からブラウスと腰蓑、ブラウスとスカートへと変化し、古い型のローブに変容していった(Ibid. 1953:

153)。

つまりミッション・ローブは西欧人の太平洋島嶼来島以降に誕生した植民地主義の流れを汲む衣服であり、「伝統の創造」である。ミッション・ローブ研究でリフー島を調査したパイニによれば、ローブ・ミッションは慎みと謙遜という西欧形式をカナク女性に強制したものである(Paini 2003: 235)。つまりカナク女性本来の衣服ではなく、西欧的なまなざしが構築したものと見える。「伝統の創造」とは一見して「過去からの伝統文化」とみえるものでも実は近年構築されたもので、歴史を再構築し「伝統」とみなされた要素をさす。ここに太平洋島嶼のムームーをはじめとする先住民女性へミッシヨナリーが着用を強制した衣服が該当する。なかでもミッション・ローブはフランスの当時の最新モードが盛り込まれたため、ヨークやレース、ギャザーといった瀟洒な雰囲気では他の太平洋の衣服とは異なる凝った特長をもつ。



図1 ミッション・ローブ

「伝統の創造」であるミッション・ローブは時代とともに変容した。1900年頃の写真資料によると襟の詰まったワンピースで、ギャザーを肩部分にとったプリント生地寸胴型が多い。ここにはまだヨークやレース、切り替えなどの特長がみられない。一方、当時の入植した西欧人女性は帽子に襟の詰まったブラウスとウェストをベルトなどで絞った丈長スカート、ないしはワンピースである。カナク女性の装束とはウェストを絞っているか否かの差異のみである。その後ヨークがデザインされ、切り替えにレースが施されたデザインが編み出され普及したと考えられる。

素材をみると、現在は綿だけでなくポリエステルやレーヨン、絹、綿化繊混合などの生地が使われ、ヌメアでは中国からの輸入生地が多い。色彩も鮮やかになり、大きな花柄が使われるようになった (Ibid : 242)。

ミッション・ローブの明らかな変容はデザインに示される。当初のデザインではヨークとギャザー、ウェストを絞らない形式が基本といえるが、基本形以外はかなり改変されている。襟は丸首だけでなく、V字、スクエア型など様々な変化が加えられ、ヨークに施されたボタンも前開き、後開きのみではなく、かぶり式、前身ごろをあけてボタンをつけたブラウス型など多様なパターンとなった。さらに出産後の母親用に授乳できるよう胸部があけられる形式も作られ、女性のライフステージや用途によって選択できるようになった。袖も七分や長袖だけでなく半袖も制作され、裾もくるぶしまで覆う丈長から、膝丈などのミニス



図2 右側：丈の短いタイプ

カート丈まで編み出された (図2)。

要するにミッション・ローブと一見して判別できる形式でありながら、カナク女性の社会環境に応じて様々なタイプが生み出された。

これら最新モードはほとんど首都ヌメアで制作されている。ヌメア中心街には衣料品店、衣服も扱う雑貨店が多数あり、いずれも個人経営で奥にミシンを置いて制作している。とりわけ *gouverneur sautot* 通りには十数軒のミッション・ローブ専門店があり、ウィンドーショッピングを楽しむ女性客がみられる。ここではほとんどヴェトナム移民によって衣服が制作・販売されている。そしてこの通りのミッション・ローブがニューカレドニアの女性民族衣装の最新モードとなっている。

ヴェトナム人はとくにヴェトナム戦争以降、多くの移民がニューカレドニアに来島し<sup>5</sup>、現在では雑貨店、レストラン経営など、ヌメア周辺で重要な役割を担っている。この通りにあるA店では結婚式の衣装を中心に、ミッション・ローブも制作・販売する。またB店は狭い店内に二台のミシンと試着室が一つあり、ヴェトナム人夫妻が制作・

販売する。この店で白い布を染色、型による模様のプリント、裁断、縫製を行う。B店経営者へのインタビューによれば、1日約10着のミッション・ローブを制作するとのことであった。2005年頃の調査ではインド製の生地を使用した「インド風」ローブが流行した（図3）。



図3 「インド風」ローブ

生地に関しては、中国、韓国、インドネシア、インド、日本などから輸入ものを利用しており、参与観察では「難あり」の日本製生地が別店にあった。こうした店へ購入に来るのはカナク女性か混血女性を中心に、フランス人居住者や観光者が来る割合は少ない。昼休みなど仕事の合間に寄る混血女性のグループ、結婚式に参列する部族女性の衣装を注文し取りに来たヤテ部族の男性、最新モードを求めてやってきたカナク女性教師、試着を何度も試みるカナク女

性がみられた。この通りはミッション・ローブを求める地元住民がおもに利用する。他の通りでもショー・ウィンドーにミッション・ローブを飾る店、Tシャツとともにミッション・ローブを販売する店などが土産店や雑貨店と混在する。

地方ではカナク女性による制作が主流であり、マレ島の女性のアトリエでは数名がミッション・ローブを制作する。材料のレースや生地はヌメアから取り寄せ、アトリエのミシンで縫製する（図4）。



図4 マレ島の女性のアトリエ

ヌメアにカナク女性が経営するミッション・ローブの店が2005年に開業した。経営者はリフー島出身で、「島の色彩（Couleurs des îles）」という店名である。店の奥に制作室があり3台のミシンが置かれ、制作・販売ともにカナク女性が行う。ヌメアではベトナム人が中心に制作・販売する中で、着用する側であるカナク女性が主体的に制作・販売に関わった最初の店である。経営者がリフー島出身で、最初にミッションナリー

が上陸したのがこの島であり、ミッション・ローブの研究・調査がなされた島であることをふまえると、リフー島でローブに関する意識が高いことがうかがえる。

制作側にとってミッション・ローブはおおまかに2つに分類される。一つは「伝統的」と称されるデザインで、ヨークとギャザー、袖を途中で絞り込んだ典型的な衣装であり、過去から引き継いだ服装として制作される。もう一つは「近代的」といわれるもので、変容によって新たに創作された自由なデザインと素材、色彩の衣装をさす。後者は先に述べた「インド風」やヴェトナム風、洋装の要素を導入したものなど、様々な外来要素と結びついたミッション・ローブであり、現在カナクや混血女性に人気の衣服である。後者の変容は顕著であり、ヌメアで着用される割合が高い。これらは離島や北部など地方で「憧れの」対象であり、カナク女性にとって「どこで買ったか」は重要である。

## 第2章 アイデンティティとミッション・ローブ

植民者側から提供・強制されたミッション・ローブだがカナク女性に受容された。これをさらに進めたのがカナク・アイデンティティの高揚といえる。

仏領を経てフランス海外領土となり、1960年代以降カナクによる政治運動が生じ、1980年代中盤から後半にかけて激しい独立運動が展開された。こうしたなか、西欧人による蔑称「カナク (Canaque)」から自ら「カナク (Kanak)」と表記し<sup>6</sup>、



図5 太平洋競技会のニューカレドニア選手

民族アイデンティティを標榜する活動を政治・社会・文化などから行った。カナクの独立運動家ジャン・マリー・チバウ (Jean-Marie Tjibaou) は1985年にカナクによる文化祭典「メラネシア2000」を実施、これはカナクのアイデンティティを高めた文化祭典として注目された。

スポーツではクリケットのチームがミッション・ローブの色彩をそろえ、太平洋競技会ではミッション・ローブを統一してチームの連帯を高めた (図5)。ただし地元産ビールにクリケットをするカナク女性が描かれたが、ミッション・ローブの丈が短すぎて女性差別であるとして批判され、このイラスト缶は販売中止となった。最新モードと異なり、カナク女性の慎みとして裾丈の長さが重視される。さらに他国の民族と差異化する際に、ニューカレドニアのシンボルとして役立つ。

パイニはミッション・ローブに関して、「リフーの女性是他地域と同様に受け入れ変容させ、再コンテキスト化し、実践と知の統合を図った」と述べ、1989年のマティニオン協定 (les accords de Matignon) 以降の政治的緊張によってシンボル化した服

が多様性を示し、ローブを利用する風潮になったと記した (Ibid 2003 : 247-248)。これはカナク女性のアイデンティティ、部族や連帯を表現する服としての積極的導入を意味する。2009 以降、北部州コネで女性布教団の支部がミッション・ローブの祭典を毎年開催し、ニューカレドニア全土の女性がローブで集合するイベントとなった (Mwa Vée No.69 2010 : 12)。とりわけ 2010 年には人類学者パイニとミッション・ローブ研究家のカナク女性ワイマロ・ワポロ (Waimalo Wapoto) を招聘して会議を行った。

北部ポネリオーエンに住むミッション・ローブを制作するカナク女性は以下のように述べた。「ミッション・ローブは今日のカナク女性を表している。だが別の民族による着用もますます増えているようにみえる。……。個人的にはパンタロンと、またはバミューダと T シャツを下に着用するなど、より女性らしく自由であってよいと感じる」 (Ibid : 15) と、アイデンティティと変容を肯定的に語った。

こうしたアイデンティティへの意識がカナク女性のミッション・ローブ着用の変容を生み出したと考えられる。ミッションナリーが着用を強制して以降、先住民女性にとってローブは日常着であり、畑作業にも食事にも就寝にも儀式にも常時着用された。しかし物質文化の流入とともに様々なミッション・ローブがヌメアを中心に編み出され、1980 年代の民族運動以降はクチューム (coutume)<sup>7</sup> や冠婚葬祭のような祭礼・儀礼といった公式な場に着用する服となり、日常着と区別されるようになった。

さらに時代を経ると若い女性の「ミッション・ローブ離れ」が顕著となり、彼らは「ヨーロッパ風の」服装、すなわち「T シャツとジーンズ」、いわゆる洋装を日常的にするようになった。このような着用の変化は首都ヌメアで明白になっており、筆者のヌメアにおける参与観察では比較的年配者が都心部でミッション・ローブを着用しているのに対して、若年層の女性は年少の子供を除いて、10 代、20 代に関してはとくに洋装が圧倒的に多い。学校に着用する女子学生はほとんどみられず、「ミッション・ローブ離れ」はグローバル化とともにさらに加速すると予想される。

なお、離島などでの婚姻に、花嫁は西欧由来の白いウェディング・ドレスを着用し、参列の女性等は特別にヌメアの衣料店などであつらえた同一のミッション・ローブを着用することがあり、儀礼時の需要は継続して残存している。

### 第3章 民族衣装の観光資源化

民族衣装離れは先住民のグローバル化によるところが多く、文化人類学からみれば文化変容の一形態であり、「文化の均質化」、「西洋文明の波及」に該当する。様々な民族にも程度の差こそあれみられるものであり、太平洋島嶼をみてもハワイ、サイパン、タヒチ、サモアなど多様な島嶼民族が若年層を主体に洋装となりつつある。

こうした状況において観光が民族衣装を意識付け、継承、再構築させる役割は大きい。言い換えれば観光による民族衣装の資源化である。この観光資源化はあらゆる国

や地域で展開しており、ニューカレドニアにおける特異性ではない。しかし先住民女性の衣装と観光文化の関係を未独立地域でみることは、観光の「南北問題」<sup>8</sup>の中で生じる文化現象をみることでもある。したがってアイデンティティ高揚後のミッション・ローブの観光資源化を事例考察する。

ニューカレドニアはジュール・ガルニエによるニッケル鉱脈発見以降、ニッケル採掘が主産業となった。露天掘り鉱山による採掘、精錬工場などからの汚染問題が深刻化した1970年代に意図的に観光産業にシフトし、それ以降観光産業を推進する。首都ヌメアを中心に観光開発が進み、太平洋のフランス圏として他のメラネシア島嶼、ないしは周辺国と差異化を図る。

ヌメアではフランス的要素を中心に、「コロニアル」な瀟洒な建物や街並み、ときにはフランス由来の食文化、土産品を宣伝する。一方、北部州や離島ではカナク文化を強く打ち出している。とくにロワイヨータ諸島のリーフレット兼地図はカナク男性や女性をモデルとして、サンゴ礁を背景に色彩鮮やかなものとなっている。この際、カナク女性はミッション・ローブを着用しており、男性は上半身裸で腰にパレオを巻く写真が主流である。

カナク女性にとってミッション・ローブはかつてのような「白人」による差別的なカナク女性の衣装ではなく、観光を誘致する際の有用な観光資源になっていることがわかる。筆者が2004年にマレ島を調査した際、民宿（ジット）経営者の娘、C（図6右）が送迎時にはミッション・ローブを着用、宿（自宅）に戻ると「Tシャツとジ

ンズ」に着替えるなど、着用の峻別化がみられた。これは歓迎をする際の「ハレ着」としてのミッション・ローブと普段着という峻別化である。なお、宿で調理など家事を担当するCの姉（図6左）は西欧風の普段着であった。



図6 マレ島の民宿の姉妹

民族衣装の観光資源化で最も一般的なものはホテルや観光施設の従業員による制服としてのミッション・ローブもしくはローブ風デザインの導入であろう。ホテルや文化センター、博物館、レストランなどの観光施設ではスタッフの制服としてのミッション・ローブ着用、もしくはローブの要素を取り入れた装束の着用がみられる。これは利用者に当該地域の雰囲気を楽しませる目的、および観光での女性の民族衣装が正装に準じたものであることを示している。すなわちホストによる民族衣装の着用が、観光という「ハレ」の場において定型化されたものである。

また、ヌメアではチバウ文化センターのイベントにて、個人によるミッション・ロー



図7 チバウ文化センターの工芸イベント

ブの積極的着用がみられる。ここではしばしば先住民女性による工芸品や料理のイベントが実施される。この際、参加のカナク女性が主体的にミッション・ローブを着用する（図7参照）。儀礼の場合は参加者だけでなく、見学者もローブを着用することもある。ここではヌメアの移民ではなく、太平洋島嶼の他の民族でもなく、先住民カナクである点が強調され、ニューカレドニアの固有性を主張する手段となっている。

さらにカナクのダンス・グループ、ウェ・チェ・チャ（We Ce Ca）も民族衣装を統一して観光者をもてなす。大型の客船がヌメアのモーゼル湾に入港する際、トーンテウータ国際空港、チバウ文化センター、ディナー・ショーを実施するホテルのレストランなどでカナクのダンスが披露される。この際、ダンサーは統一されたミッション・ローブを着用する（図8）。黄系統や紫系統など数種類が場所に応じて選ばれる。

一方、「白人」入植以前の先住民の装束



図8 We Ce Caの女性による踊り

になるべく近いものにしようとする動向もみられる。チバウ文化センター「カナクの道」では、創世神話劇「テア・カナケ（Tea Kanaké）」を毎週木曜午後に披露するが、ここでは男性は腰蓑にボディペイント、女性は植物の繊維で作ったワンピースと髪飾りという装束で劇を上演する（図9参照）。これはボディペイントと植物性の繊維のみの、植民地化以前の装束に可能な限り近づけた事例である。その場合はミッション・



図9 創世神話劇の装束

ローブではない、より古い「伝統衣装」が観光の場で再構築され、公開される。そのため、民族衣装の観光化での二重性を生み出し、観光者に混乱を招くおそれもある。しかし観光では多民族社会や太平洋地域圏、過去と現在、外来文化の導入など様々な要素が混交したり利用されたりすることがあり、これをふまえれば観光がこの島で進展した証といえよう。

地域興しイベントの参加者内でヌメアと地方のローブという対比がカナク女性に広がるケースがみられた。2004年に筆者が参加した北部州観光局主催の地域興しイベントが本島中部コネで開催された。この地域興しの参加者はヌメアなど都市部のフランス人や移民などが大半であり、さらにフランスやオーストラリアからなど海外からの観光者も含まれ、総勢約200人が2日間、カナクの工芸、筏やカヌー、「伝統的」家屋創り体験、伝統食などを体験した。コネの集落からは女性の会が食事の用意や宿泊する集会所の整備を行い、周辺部族村の人々、北部州観光局スタッフ、さらにヌメアの高校で観光を専攻するボランティア学生が手伝った。ここでの服装は参加客および高校生、若年層の部族集落の女性において洋装であったが、女性の会のメンバー、地元部族集落の人々はミッション・ローブであった。コネでの日常着としてのミッション・ローブと異なり、北部州観光局のカナク女性と筆者は夜の宴会時にミッション・ローブを着用した。地元女性はヌメアで創られた「近代的な」ローブをほめつつ、「私の服はこんなだけけれど」と自分のローブをみつめた。地方の人々も何らかの形で

ヌメアを訪問し、カナク女性はこの際にミッション・ローブの最新のものを入手できる。しかしこうした地域興しイベントで民族衣装は、夜の宴会でのヌメア対地方という対比構造でカナク女性に映ったといえよう。

また、ヌメアでフランス人が経営する服飾品店で新たなミッション・ローブが土産品として好評を博している。リーヌ・クリアション社 (Lyne Creations) による製品で、ヌメア郊外に染色・縫製工場を、中心街に店舗をもつ。観光名所となっているヌメアの朝市においても露店を出しており、デザインと機能性から土産品として観光者に人気が高い。とくにミッション・ローブは綿製品を主流として、経営者のフランス人女性が独自に創作した南国調の花柄やノーチラスや亀などがプリントされ、洋装のようなデザインに色彩も鮮やかなものが多い (図10)。



図10 リーヌ社のミッション・ローブ

ここで販売されるのは「近代的なモード」

が大半であるが、一方でカナクの「伝統的工芸」として博物館にも展示される竹線画のような文化遺産的デザインを盛り込んだものもみられる。経営者の談話によれば「子供の頃、親の仕事でフランスからニューカレドニアに来た。……。カナクのデザインを独自に学び、デザインに取り入れている」とのことである。ヌメアに在住するカナク女性も店に立ち寄るが、この店では土産品としての需要が高く、カナク女性の民族衣装やそのデザインを観光の場で広く知らしめる役割を果たす。なお、これらのデザインはキッチン用品やバッグ、小物入れなどにも利用されていて土産品の多様な展開が示される。

土産品としてミッション・ローブ専門店で購入する海外からの観光者は少ない。わずかに先述の朝市などでリーヌ社の服飾に触れ、ホテルの土産店やアンスバタの土産店で購入する程度といえる。

そして近年、カナク人形とよばれる土産品がガイドブックにも掲載されるようになった。筆者の参与観察によると、1990年代半ばから後半には土産品としてはほとんどみかけなかったが、最近になってガイドブックだけでなく、ヌメアの土産店でみかけるようになった人形である。カナク人形は森村桂の小説『天国にいちばん近い島』にも記載されるが<sup>9)</sup>、ミッション・ローブを着た先住民女性を象った人形である（図11）。

この人形には様々なミッション・ローブが着せられており、髪飾り、ポシエットなどの付帯物もついている。観光者からすると好みのミッション・ローブを着た人形



図 11 カナク人形

を選び購入することができる。人形の服装はいずれもヨークとレース、ギャザーなどミッション・ローブの基本形がほぼ忠実に再現されたものであり、鮮やかなプリント柄である。これは「近代的」ローブの特長であり、グローバル化した土産品にも対応する。

この他にカナク女性を描いた絵葉書やしおり、絵画や工芸品が土産品として販売されているが、いずれも鮮やかなミッション・ローブをまとった女性が描かれている。カナク女性の芸術家によるイラストも人気をよんでおり、女性のアトリエにおいてもカナク女性は工芸品とともにミッション・ローブをおくなど、先住民女性による主体的な販売が展開される。

なお、パイニはミッション・ローブの変遷の研究において kimono とよばれる衣装が、リフー島では kimonu または iheetr とよばれる前開き（ボタン）で V 字、袖なしの服飾であるとしている（Paini 2003: 246）。Kimono と日本語との関係はパイニが述べるように別の調査研究が必要であら

う (Ibid : 247)。しかしこうした起源を捨象するならば、ヌメアの朝市やリーヌ社等では土産品として kimono がミッション・ローブとともに販売されている (図 12)。これが日系移民によりもたらされたものか、あるいはグローバル化によってもたらされたものか、判別が现阶段で困難であるものの、ローブの一形態としてともに土産品に加えられている。



図 12 リーヌ社の kimono

## おわりに

ミッション・ローブの研究はカナク女性の歴史の一部であり、ミッシヨナリーによる植民地主義の象徴でもある。過去に入植者側からの差別的用語、先住民女性蔑称の対象となりながら、現在に至るまでカナクや混血女性を中心に着用されている。そこには先住民女性にとって強制された被服でありながら、もとはパリの一流デザイナーがデザインするなど当時の最新モードであったこと、多様なバリエーションが可能であったため、用途や流行、地域性にあわせて改変されたこと、現地の気

候風土に衣服が合ったことなどからカナク女性に受容され普及した。

一方でカナク男性の衣装は「半裸体」から腰蓑、腰巻、さらには入植者の持参した洋装となっており、女性のような特別にあつらえられた服がなく、西欧的同化の道をたどった。男性にはミッション・ローブに該当する民族衣装がない。そのためニューカレドニアのシンボルとして、カナク女性のミッション・ローブが注目されたといえよう。

さらに 1980 年代のカナク独立運動の高まりとともに、カナク文化が再考され、徐々に復興した。植民地化によるフランスへの同化政策で、一時期カナク文化は否定ないしは禁止されたものも多いが、民族文化の復興とともにカナク女性のシンボルとしてミッション・ローブが意識され、先住民アイデンティティの象徴となった。現在では冠婚葬祭やクチュームだけでなく、様々な行事に着用される。また、クリケットなどのスポーツ選手が着用し連帯と統一感を表明する。

この一方でグローバル化の波を受けて、若者の「ミッション・ローブ離れ」が進み、他の社会と同様に「T シャツ、短パン、ジーンズ」などの洋装が定着した。このためミッション・ローブはヌメアにおいてとくに日常着ではなく「よそ行き」の装束となり、特別の折に民族を意識して着られるものとなった。日本の着物においても同様の状況が言及できるが、先住民としての意識が行事で示される時に限定され、ヌメアでヴェトナム人が主体で制作する「近代的モード」のミッション・ローブがますます増加し、

多民族の衣装と混交したアレンジが盛んになった。

地方や離島では年配者や幼年層を中心にミッション・ローブの着用がみられ、カナク女性を中心に制作されたものが、日常着として流通する。また、彼女等もヌメアに訪問した際には「近代的モード」を購入するゆえに、カナク富裕層には地方においても改変されたデザインがみられる。

こうしたなかで最もミッション・ローブが注目されたのが観光産業であり、タヒチやフィジーのようにとりたてて統一された言語のような象徴性<sup>10</sup>もなく、かつて統合された民族文化のシンボルも存在しなかったカナクの象徴、敷衍すればニューカレドニアの先住民文化の象徴として、ミッション・ローブが使われた。ホテル、博物館、文化センター、各種観光施設で利用され、ダンス・グループにおいても重要なチーム装束の役割を果たすことになった。観光に従事するカナク女性は日常と仕事（観光）で着替えるなどの峻別化をすることで、「見られる」対象としての場を意識し始めた。

さらには土産品としてのミッション・ローブも顕著であり、リーヌ社のように土産品を主力とする商品としてアレンジしたミッション・ローブが販売され、ニューカレドニアの記念品としての役割を果たしている。またカナク人形も様々なミッション・ローブ姿となっており、絵葉書やしおり、ポスター式絵画などにミッション・ローブのカナク女性が西洋のイラスト風に描かれている。

このようなミッション・ローブの観光資源化はハワイのムームーやヴェトナムのア

オザイなどと同様に民族文化の観光資源化であるものの、メラネシアの唯一の未独立島であるニューカレドニアにおいては、フランスの雰囲気観光での主力商品とする一方で、ニューカレドニアの先住民という意識を観光で流布する重要な機会である。島の歴史や文化に関わるカナク女性の衣装はメラネシア・イメージにもなるため、観光者にとって地域独自の記念品となりうる。近々にフランスからの独立の是非を問う住民投票を控えたニューカレドニアでは、カナクのアイデンティティや象徴性を観光文化でも強調することが積極的に進められているように思われる<sup>11</sup>。こうした流れにおいて、温和にカナク文化を示せる手段としてミッション・ローブは欠かせない観光資源といえよう。

註

- 1 学問分類上、太平洋はポリネシア、メラネシア、ミクロネシアに分けられる。メラネシアはパプア・ニューギニアやソロモン諸島、フィジーなどを含む地域で「肌の黒い人々の島」が原義。
- 2 現在 29 言語が認められ、300 以上もの部族に分類される。なお、ウヴェア島では「アウトライアー・ポリネシア（ポリネシアの飛び地）」としてポリネシア語であるファグ・ウヴェア語が島の両端で認められる。
- 3 おもにココナツの繊維が利用された。
- 4 ニューカレドニアは本島の他に幾つかの離島から構成される。英語表記はロイヤリティ諸島で、ウヴェア、リフー、マレなどから成る。
- 5 それ以前から仏領インドシナとして移民が来ており、「ニッケル移民」も多い。「ニッケル移民」はニッケル鉱山での労働力として来島した移民をさす。
- 6 カナクの語源はポリネシアのハワイ方言タンガタであるといわれ、もとは「人」を意味する。これを西欧人等はカナカと蔑称化し、仏領ニューカレドニアでは植民者等が canaque とした。これらが蔑称であるため、「人」に回帰して自ら表記を変更して kanak とした。
- 7 慣習。現代のクチュームは布、タバコ、1000CFP（パシフィック・フラン）紙幣などを備えて行う。
- 8 南を第三世界などの観光目的地、北を開発側・観光訪問側ととらえた支配・被支配構造。観光の新植民地主義とはほぼ同義である。
- 9 主人公が入院時に日系人からもらった人形も記述から当時のカナク人形と思われる。
- 10 「ブーラ（こんにちは）・フィジー」や「イアオラナ！（タヒチ語でこんにちは）」のような現地語の観光キャッチ・フレーズがニューカレドニアにはない。
- 11 この他に独自の旗をデザインしたもの、博物館や文化センターの文化遺産をデザインしたものなどが土産品に多数アレンジされている。

引用・参考文献

- [1] Delathière, Jerry, 2004, La Foa 120ans d'histoire municipale, Édité par la Marie de la La Foa, Agence Demain.
- [2] Guiart, Jean, 1990, Maurice Leenhardt, Le Rocher-à-la-Voile.
- [3] Mwa Vée, No 69, 7-9.2010, De la robe mission à la robe kanak, L'ADCK-Centre Culturel Tjibaou.
- [4] Neporon, Micheline et Suzanne Bachelot, 1991, Kungô Bré, ADCK et Les editions Populaires.
- [5] O'Reilly, Patrick et Jean Poirier, 1953, L'évolution du costume, Journal de la Société des Océanistes 9, pp.151-169.
- [6] Paini, Anna, 2003, Rhabiller les symbols: les femmes kanak et la robe mission à Lifou (Nouvelle-Calédonie), Journal de la Société des Océanistes 117, pp.233-253.